

らに歴史的解釈をすべきであると言えよう。今までの国語学史の研究は業績の解説が主としてなされ、歴史的考察は比較的粗雑であったように思う。本書はもちろん研究の真義の究明に力をつくすが、それと共にこれを歴史的立場から考察して意義づけることに、特に意を用いたつもりである。

最後に本書の改稿に際して、私は身辺が多忙であったので、愛媛大学の同僚三吉 陽氏の援助を得たことがきわめて多い。また背文字及び扉文字は佐伯梅友氏に書いていただいた。ここに記して深く両氏に感謝する次第である。

昭和三十三年三月

著者 本橋 誠

目次

第一章 序 説

第一節 国語学史の意義…………… 一七

 一、国語学史の問題(一七) 二、研究法(一七)

第二節 国語学史の組織と時代区画…………… 一八

 一、国語学史の組織(一八) 二、時代区画(二二) 第一期(二二) 第二期(二二)

 第三期(二四) 第四期(二四)

第二章 第一期の研究

第一節 第一期の研究概観…………… 二六

 一、研究及び概観(二六) 二、本期の時代区画(二六)

第二節 初期の研究…………… 二九

 一、上代人の国語意識…………… 二九

 一、概説(二九) 二、古語(三〇) 三、俗語方言(三〇) 四、訛語転語(三一) 五、観

 三、念語運用辞(三一)

 二、日本紀私記における国語研究…………… 三三

一、概説(三) 二、訓注(四) 三、釈義(三) 四、語学的方法(三)

三

三、字書の製作

一、字書の発生(七)

二、新撰字鏡(五) 三、倭名類聚鈔(五)

三

四、仮名及び音図

一、万葉仮名(四)

二、平仮名(四)

三、片仮名(四)

四、仮名の意義(四)

四

五、音図(四) 六、いろは歌(四)

七、結び(四)

第三節 中期の研究

四

一、悉曇学に見える国語研究

四

一、当時の悉曇学と明覚(四)

二、悉曇要訣(四)

三、その後の悉曇応用の大勢(五)

二、歌学における国語研究

三

一、歌学の興隆(五)

二、音通(五)

三、音の省略添加(五)

四、語義語源(五)

五、様相の意識(五)

三、仙覚抄と积日本紀

六

一、概説(金)

二、仙覚抄(金)

三、积日本紀(六)

四、和漢字書の出現

六

一、類聚名義抄(六)

二、色葉字類抄(六)

三、字鏡集・平他字類抄(六)

五、仮名づかいの発生

四

一、仮名づかい問題の発生(四)

二、定家仮名づかい(金)

三、その後の発展(六)

第四節 後期の研究

六

一、仮名づかい研究の進展

六

一、定家仮名づかいの批判(七)

二、仮名文字遣(六)

三、その後の大勢(六)

二、てにをは研究の発生と発展

三

一、概説(七)

二、八雲御抄(七)

三、手爾葉大概抄(七)

四、連歌師の研究(七)

五、大概抄の増訂(七)

六、一步(七)

三、国語の品詞的分類と活用を意識

六

一、品詞的分類(七)

二、活用(七)

四、字書及び辞書形態の業績

六

一、字書(八)

二、歌学書の語釈(八)

三、辞書形態の語釈書(八)

四、日常語の解釈(八)

第三章 第二期の研究

第一節 近世国学の成立と本期の研究概観

金

一、国学の成立(六)

二、本期の研究概観(六)

第二節 契沖の研究と仮名づかい

六

一、契沖とその注釈(八)

二、歴史的仮名づかいの定立(八)

三、定家仮名づかい

の亜流(九)

四、歴史的仮名づかいの進展(九)

五、上田秋成の仮名づかい論(九)

第三節 語義語源及び方言の研究…………… 四

- 一、語義研究概説(九四) 二、貝原益軒(五)
- 三、新井白石(六) 四、谷川士清(九)
- 五、特殊の辞書(一〇〇) 六、方言研究(一〇一) 七、字書(一〇三)

第四節 荷田春満と賀茂真淵の研究…………… 一〇四

- 一、荷田春満(一〇四) 二、賀茂真淵(一〇五) 三、語意考(一〇九)

第五節 てにをは研究と富士谷成章の研究…………… 一〇八

- 一、概説(一〇八) 二、旧派のてにをは研究(一〇九) 三、富士谷成章(一一一) 四、挿頭抄(一二三) 五、脚結抄(一二三) 六、装図(一二五) 七、富士谷学派(一二八)

第六節 本居宣長の研究…………… 一一六

- 一、概説(一一六) 二、てにをは研究(一二〇) 三、活用研究(一二一) 四、音韻研究(一二三) 五、用字法(一二七) 六、結び(一二八)

第四章 第三期の研究

第三期の研究概観…………… 一一九

第一節 第三期の研究概観…………… 一一九

- 一、本期の研究概観(一二九) 二、本期の特色(一三〇) 三、活用研究(一二一) 四、音韻研究(一二三) 五、用字法(一二七) 六、結び(一二八)

第二節 鈴木胤と本居春庭の研究…………… 一三三

- 一、鈴木胤(一三三) 二、雅語音声考(一三三) 三、言語四種論(一三三) 四、活語断続

- 譜(一三三) 五、本居春庭と詞八衝(一三六) 六、活用の種類(一三六) 七、活用形の整備(一四一) 八、詞通路(一四一)

第三節 東条義門と富樫広蔭の研究…………… 一四三

- 一、東条義門(一四三) 二、活用研究の体系的部門(一四三) 三、活用言の研究(一四三) 四、てにをは、音韻の研究(一四四) 五、富樫広蔭(一四五) 六、当時の活用研究(一四五)

第四節 平田篤胤及び伴信友と文字の研究…………… 一四四

- 一、平田篤胤(一四四) 二、神代文字論(一四四) 三、音韻論(一四五) 四、伴信友(一五〇) 五、用字法(一五〇)

第五節 てにをは及び音韻の研究…………… 一五六

- 一、萩原広道(一五六) 二、橋守部(一五六) 三、本期のてにをは研究(一五六) 四、音韻論(一五九) 五、結び(一六〇)

第六節 語義語源の研究…………… 一六〇

- 一、注釈書(一六〇) 二、辞書(一六〇) 三、雅言集覧・俚言集覧その他(一六〇) 四、音韻論(一六〇) 五、結び(一六〇)

第七節 語学研究の独立と文法書編著の傾向…………… 一七一

- 一、語学研究独立の傾向(一七一) 二、文法書編著の傾向(一七三)

第五章 第四期の研究…………… 一七五

- 第一節 第四期の研究概観 一五
- 一、概説(一五) 二、新傾向(一七) 三、戦後の研究(一七)
- 第二節 文法の研究 一六
- 一、概説(一七) 二、前期の大勢(一八) 三、後期の大勢(二四) 四、口語法(二八)
- 第三節 文字及び仮名づかい 一六
- 一、文字の研究(一八) 二、国字論(一九) 三、仮名づかい論(一九)
- 第四節 語音語義及び方言の研究 一五
- 一、国語音研究(二五) 二、方言研究(二六) 三、語義研究(三〇)
- 第五節 歴史的研究・比較研究及び組織的研究 一〇一
- 一、歴史的研究(三〇) 二、比較研究(三三) 三、組織的研究(三九)
- 第六節 戦後の研究 一〇六
- 一、国語政策的研究(一〇七) 二、国語学的研究(一一〇) 三、結び(一一四)

第一章 序 説

第一節 国語学史の意義

一、国語学史の問題 言語学は世界の一般言語事象を研究し、国語学は国語の諸種の言語事象を研究する。わが国民は千年以上も前から国語に対して考究してきたが、特に近世の国語ではこれを重要な研究部門としていた。国語学史はこのような国語への考察研究のあとを歴史的に研究する学問である。今まで研究されてきた主要な問題を概観すれば、(一) 国語の性質を明らかにする部門として音韻・品詞・文体などの研究があり、(二) 意義を考究するものとして語義・語源の研究が主として注釈書と辞書との形でなされており、(三) 文字に関するものには漢字・仮名・神代文字・ローマ字などの研究があり、(四) 歴史的研究としては各時代の言語の特質ないしは発達変遷の研究があり、(五) 地域的な研究としては各地の方言の研究及び標準語に関する研究などがあり、(六) 外国語との関係については外来語あるいは国語系統の問題などがある。

七、富士谷学派。一大學的偉容を樹立した成章の学も、繼承者は本居学派に比して乏しく、わずかにその子御杖（文政六年没）と保田光則（明治三年没）を得たにすぎない。御杖には古事記・万葉・土佐日記その他歌文の注釈及び歌道の著書などが多い。語学方面で注目すべきは俳諧天爾波抄（文化四年刊）及び脚結抄翼などであり、前者は脚結抄の説によって俳諧に用いるてにをはの意味用法を述べ、後者は脚結抄の注解である。光則には挿頭抄の補訂をした挿頭抄増補（嘉永四年成る）・脚結抄の補訂解説をした脚結抄考及び脚結抄増補と、伝わらぬ装抄を補おうとする新撰装抄などがある。共に次期特有の綿密な学風を示しているが、迫力に乏しくさまで見るべきほどの研究でもない。本居学派に比して概して振わなかつたわけについては、あるいは術語の難解なこととか、考え方が綿密繁雜にすぎたこととかにもよろうが、それよりもむしろ本居学が規模雄大内容豊富で、中心に新しい古道の理想をいだいて熱情があり、はなはだ学的魅力に富んでいたのに比べて、学の門戸内容が本居学に及ばず、また掲げるべき新理想に乏しく、かつ学者としては比較的早世（四十二才没）した点などを根本とすべきであろう。

第六節 本居宣長の研究

一、概説。宣長（寛政十三年没）は伊勢の松坂の商家に生れ、二十三才の時医学修業のため京都に遊学して漢学者堀景山について学び、二十八才の時帰郷して医を業とした。京都遊学時代に早くも契沖の著書に接して、その研究態度に啓発される所があり、帰郷以来研究して歌物語の学では早く一家の見を樹立していた。宝暦十三年三十四才の時、松坂の宿で一夜真淵に接して以来古道主義の精神をうけ、その後書簡をもって教えを受け、古事記研究に学問の中心を得た。こうして七十二才で没するまでに研究著述するところは数十部に及ぶが、業績の形態は古事記伝を主著とする注釈書と、古道ないし歌文の道を發揮しようとした論説の書とに大別される。注釈的研究では古語の意義を帰納的実証的に適確公正につかみ、さらにしばしばその語の時代的意義をも深くきわめ、国学における語義探究の最高峯をなしている。また業績を内容によって大別すれば、古事記以下の神典を中心とした古道の学と、源氏物語以下の文学書を中心とした文学説と、広く一般古典の研究から得た語学説との三大部門に分けることができる。彼の語学は古書を理解するための、また歌文を作成するための、基礎として研究されたのであった。こうして数多い彼のこの方面の業績を概観する時（一）主として中古の歌文から帰納されたてにをはの研究、及び（二）活用の研究と、（三）主として上古の文献についてなされた